

平成18年11月18日発行

第31号

社会福祉法人 水仙福祉会  
〒533-0044 東淀川区小松1丁目14-12  
Tel 06-6328-3786 Fax 06-6328-3833

題字 岡村 重夫

# 風の袖

## 卷頭言

## 認定こども園について

(社福)水仙福祉会

理事長 松村 寛

第三の子どもの施設  
平成19年度に誕生へ

経営問題になつてゐる。

そのためこの打開策として

考え出されたのが、認定こども園である。保育園が足らぬ

幼稚園を所管している文部科学省が、嫌がる厚生労働省を強引に説き伏せたということのようだ。端的に言えば、幼稚園の救済策である。

保育園と幼稚園は  
目的も性格も異質で、戦前から様々な形で一元化の運動が起こされてきた。  
地域に住む子どもは、同じ

施設で保護教育を受けられるようにしようという願いである。

打算からの  
幼保一元化

いま、「認定こども園」の問題がにわかに出現し、保育界を賑わしている。これは保育園でもなく、幼稚園でもない、新たな第三の子どもの施設である。最初から新設してよいが、実際は、既存の幼稚園に保育園的機能を持たせるか、また既存の保育園に幼稚園的機能を持たせるかをして、それを認定こども園にして、ようというものである。

1970年代後半から少子化の現象が現れ、その傾向は今まで続いている。こうした現象にもかかわらず、永い経済の不況から女性の社会進出が進み、保育園への入所希望者が増加した。一方、幼稚園は定員割れが続き、深刻な

さて、日本の児童施設は明治の時代に、幼稚園は富裕家庭の子女の教育施設として出発し、片や保育園は農村の農繁期の季節託児所、都市のスラム街におけるセツルメントとしての託児所、戦争遂行のための戦時託児所等が基盤となつて、戦後は婦人労働を支えるものとして今の保育園に発展してきた。

したがつて、保育園と幼稚園は、目的も性格も異質なものとして存在してきたのである。しかし、この二元化の形

のようになつていくべきであろう。しかし、それにしては両者は余りにも無原則に発達してしまつた。幼稚園同士、保育園同士は行政の指導で地域の適正配置が守られてきたが、幼保の関係は目茶苦茶である。特に都市では背中合わせというのもあるから、必ず混乱が起ることだろう。こうした調整もなしに、平成19年4月から「認定こども園」が発足する。

理念からではなく、打算から出発しようとしているの

のなら、幼稚園に保育園的機能を持たせればよいのではないかといふものである。幼稚園を所管している文部科学省が、嫌がる厚生労働省を強引に説き伏せたということのようだ。端的に言えば、幼稚園の救済策である。

さくて、日本の児童施設は明治の時代に、幼稚園は富裕家庭の子女の教育施設として出発し、片や保育園は農村の農繁期の季節託児所、都市のスラム街におけるセツルメントとしての託児所、戦争遂行のための戦時託児所等が基盤となつて、戦後は婦人労働を支えるものとして今の保育園に発展してきた。

施設における処遇も、幼稚園的とか保育園的とかではなく、家庭や子どもの状況に合わせた弾力的なものとなつてゐる。

こうした幼保一元化は、理念としては理想であるし、そ

うした調整もなしに、平成19年4月から「認定こども園」が発足する。

理念からではなく、打算から出発しようとしているの